

神戸国際大学
キリスト教センター通信

第139号
2025年11月18日

「大切な人」

神戸国際大学オルガニスト
伊藤 純子



あなたにとって大切な人は誰ですか？私には大切な人が大勢居ます。その中には、既に天国に見送った人が何人も居りますが、私が20才台の頃に天に召された大切な人は、元気なころ私にポロっと次のように言いました。自分のお母さんから、「死んだら髪の毛になって見守ります」と言われていたけれど、「私は空気になってあなた（筆者）を守るのよ」と言ったのです。

彼女はその後洗礼を受けましたが当時はクリスチャンではなく、キリスト教の感覚での発言ではなかったのかも知れません。それでも、この言葉にはキリスト教で言うところの「聖霊」のイメージを感じます。これを耳にした時の私は、非常に印象的で、とても温かな心持ちに包まれたことを覚えています。ただ、目の前の大切な人が亡くなるなどとてもイメージできませんので実感も湧かず、聖霊という言葉ともリンクせず、この言葉の真意について痛感してきたのは、ごく最近になってからです。

彼女は私にとって大切な人でしたから、天国に送った後はもちろん寂しい気持ちがあります。寂しいだけでなく、我ながら興味深いことに、時間が経過するにつれて、上記の言葉は私にとってとても意義深いものとして心に響くようになってきました。その重さを実感する機会が多く、改めてこの言葉について考えさせられています。

折に触れて、困ったときや苦しい時など、時空を超えて自分の周りを取りまく「空気」の中に、その人が居るという感覚をあえてイメージするようにすると、強力な力で自分が助けられる実感があります。

このような体験を繰り返す中で、ふと思うことは、この「空気」の中に居るのは、彼女ひとりではなく、「聖霊」なのではないかということです。聖霊とはキリスト教では神様の見えない力のことをあらわし、その象徴は「風」として表現されています。

どこにいても、何をしていても、どのような時間でも、私たちひとりひとりの周りには常に、神様の見えない力が必ず存在していて、私たちひとりひとりをしっかりと守り導いてくれているのです。

日本のお盆のように、11月はキリスト教では逝去者をおぼえる月です。

彼女の眠る、日本聖公会東京教区の墓地では、今年も教区の礼拝がささげられました。

上記に記した私の大切な人、つまり私の祖母には、心から感謝しています。

ひとくちメモ

逝去者をおぼえる聖歌の中に「ロンドンデリー」のメロディに乗せてアイルランドで歌詞がつけられた曲があります。最後の節の歌詞を下記に記します。

静かにねむるわが友よ 別れを今は惜しむ
わたしの心に触れた 出会いを巡らしつつ
主イエスに愛された友よ 愛の主になんて結ばれて
ともに主を歌い続けよう また会えるその日まで